

## 巻頭エッセイ

### 若手への期待



杉本邦昭

東亜建設工業株式会社 土木本部機電部長

今年の5月から6月にかけてサッカーの世界的なイベントである2002FIFAワールドカップが日本、韓国にて開催された。日本、韓国とも本大会で初の勝利を挙げただけではなく、日本はベスト16に、韓国に至っては並み居るヨーロッパ勢の強豪を破りベスト4にまで進む等、両開催国の予想以上の活躍もあり、国中が沸いたのでサッカーに興味のなかった方もそれなりに楽しまれたのではなかろうか。特に私の住む横浜では決勝戦が行われた関係で、街全体が熱くなったような気がした。

サッカーといえば、私達の高校時代のフォーメーションはWM（ダブル・エム）スタイルが主流で、このスタイルは極端な表現をするとフォワード5人は攻撃のみ、バック5人は守備のみに徹するという方式で分業型となっていた。学生時代の昭和40年代の前半から4-2-4システムが採用されるようになり、フォワード同上、バック同士でかなり自由にポジションチェンジが行われるようになった。それがサッカー技術の向上で守備重視の4-3-3システムと変り、さらに現在のようにフォワードを極端に少なくしたワントップ、ツウトップといったスタイルに移り、プレーヤー全員が攻撃と守備の両方の仕事をしなければならない万能型が求められるようになってきた。私はボールコントロール技術が進歩してきたら、サッカーもボールを手で扱うバスケットやハンドボールのように全員守備、全員攻撃の時代が来ると信じていたので、その点は非常に高く評価できると思っている。同様に、一度攻撃権を得れば必ずシュートまで持っていくのが技術的な最高レベルと考えているが、この点では日本のサッカーはまだ努力の余地があるように感じている。

話は変わるが、先日、ある協会で調査した作業船の建造実績を知る機会があった。関西国際空港Ⅱ期建設工事、中部国際空港建設工事等の大型プロジェクトに合わせて作業船が建造されているが、これらのプロジェクトが走り始めた現在、急激に建造数が低下している

ことが窺がえたとし、今後の建造予定も非常に少ないとの印象を懐いた。海洋国・日本を考えると、少々寂しさを感じる。こうした状況を見て作業船の建造ノウハウ、運営ノウハウの維持と継承に不安を感じているのは私一人ではないだろう。これらの技術継承を行うには人材の確保に尽きるが、この不況下にも拘わらず機械・電気系技術者の建設業界への応募は少なく求人担当者は苦勞しているようだ。この業界のマイナス部分が喧伝されすぎているのではなかろうか。

今夏、弊社が施工している大型プロジェクトで稼働している作業船を視察したが、想像していた以上に若手の乗組員が活躍しているのに驚いた。年令的には50才以上のベテラン勢と30才以下の若手との二つのグループに分かれるが、若手の中にも機関部の責任者として指揮しているものがいて頼もしく感じた。その折、若手のメンバーと意見交換を行ったが、「ヨーロッパにおけるトレーリングサクシオン浚渫船でのドレッシングマスターを目指したい」との抱負を聞いた時、希望の灯が見えたような気がした。私達と年代が異なるため、当然のことだが価値観も違う。しかし、将来に向けて技能的な業務から技術的・管理的な業務の総てをマスターし、コントロールしたいとの明確な目標を持つ若手と接触し、私が懸念していた技術の継承の不安は杞憂にすぎないと確信した。サッカーではないが、万能型技術屋が求められる時代に入ったと感じている。

昨今の関連業界を取り巻く環境は、長引く不況、資産デフレの進行、公共事業費の縮減等で非常に厳しい状況下に置かれているが、この業界の若手の技術者が夢をもって仕事ができるような環境造りに努めることが私達の最重要課題と考える。

本誌で16,500m<sup>3</sup>トレーリングサクシオン浚渫船「海舟」を発表させて頂いているが、この船に若手の乗組員を乗せ、世界を股にかけ仕事をしたいという夢を是非とも実現させたいと考える今日この頃である。